

日本古代史から見た東アジア古代仏教寺院研究の課題（特集 東アジア6～7世紀における勅願寺高層木塔の考古学的比較研究．第五章 東アジア古代仏教寺院研究の課題と展望）

| | |
|-----|---|
| 著者 | 熊谷 公男 |
| 雑誌名 | 東北学院大学論集．歴史と文化 |
| 号 | 40 |
| ページ | 269-270 |
| 発行年 | 2006-03-20 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1204/00024229/ |

I 日本古代史から見た東アジア古代 仏教寺院研究の課題

熊谷公男

今回の2日間にわたる研究集会は、収穫の非常に多いものであった。わたしは日本古代史を専門にしており、その角度から研究集会について総括的な感想を述べたい。中国や韓国の事情や考古学については専門外であるので、不穏当な総括となるかもしれないが、ご容赦願いたい。

東アジアの古代仏教文化については、楊泓氏が報告で述べたように、中韓日の三国間で多くの関係があった。それでは中国の古代仏教文化は、どのように韓半島と日本へ伝播し、そして各地域の仏教文化においてどのような地域的な変化を示すのか、検討すべき課題である。今回わたしが新鮮な驚きを覚え、興味を抱いたのは、中国の仏教がすでにインドやパキスタンなどとは異なり、独自の道をたどって発展したことである。龔国強氏も本書第1章の質疑応答で述べているように、中国では木塔から磚塔に発展し、韓国では木塔から石塔に発展したが、日本では一貫して木塔であった。これら東アジアの各地区では仏塔の本来の形式は同様であったが、その後、各地域で独特の変化が現れていった。これは非常に興味深いことである。

それから注目したいのは、舍利容器の奉安形式の問題である。古代朝鮮三国は中国の仏教寺院や仏塔などの文化を受容し、日本は古代朝鮮三国から仏教文化の影響を受けたが、具体的な変化はそれぞれの地域で異なっている。もっとも基本的な内容は同様であるが、各地域で独自の形式を形成した点も、さらに深く追究すべき重要な問題である。

文献資料の角度からいうならば、中国南北朝時代には百済、新羅、日本と南朝との関係が密接であり、また南朝仏教の影響を受容していたはずである。南朝仏教に関する考古学的情報がさらに多く判明すれば、古代中国と韓国、日本との関係をより具体的に解明することができるだろう。

それから今後の課題の1つには、下倉氏がすでに報告したように、都城や王権、仏教寺院との関係、そして寺院と仏塔との関係などがある。これらは古代の中国、朝鮮三国、日本にとって検討すべき課題である。とくに、古代中国の仏教は、当時国家的な仏教となっており、王権や都城の形成と深い関係にあった。したがって、国家と大規模な寺院との関係について、古代の中国、朝鮮三国、日本がそれぞれどのような形式によって対応していたか、今後、考古学と

文献史学が何らかの手段によって共同研究を進める必要があると思う。

最後に、今回の国際研究集会の開催に当たり、中国社会科学院考古研究所、漢唐研究室の安主任と室員の皆様には大変お世話になった。皆様のご尽力に心より感謝申し上げたい。

(日本国・東北学院大学教授)